

ある出征炭鉱居住家族の戦時下の生活 1940 年～1946 年春

宮西 一好

1940 年（昭和 15 年）春の家族構成

父 三十五歳
母 二十九歳
長男 七歳
次男 五歳
三男 四歳
長女 0 歳

1 1940 年春、宮西秋次は、妻と子供四人をつれて、三井美唄鉱業所、下 2 条 2 丁目に転居、同所鉄車工場に転職した。彼は、2 年あまり深川で開業していた蹄鉄所を廃業しての転居であった。私、長男一好には、廃業の理由もわからず、入学早々の転校であり、長女は、生後 1 か月での美唄であった。

2 1941 年（昭和 16 年）春、秋次 36 歳は、このことを知っていたかのように応召され、旭川に入隊した。長女は、1 歳で入院手術直後のことであった。9 月初め面会ということで、タマ 30 歳は、4 人の子供を連れ、おはぎを土産に旭川に出かけた。この時、両親の間にどのような対話があったか、子供たちは知らない。

秋次復員後の話であった。「この時移動は決まっていた、面会間もなく移動、列車は日中、木製のブラインドをおろして走った。」

美唄を通過したとき、この隙間から三井方面をのぞいた。以後、大阪港から乗船し、奄美大島経由で台湾の高雄に 11 月中旬に到着した。

3 1941 年秋、私は、第 2 人が入院したので、父の実家（東 7 条北 10 丁目）から 1 か月余り、三井美唄国民学校に通学したが、積雪期になったので家に戻った。長女と子供 3 人も入院したので、病室が住まいになり、そこから通学した。12 月 8 日朝、病院で「アメリカとの戦争が始まった。」という放送を聞いた。この日、学校での集会など覚えていない。長女が病院の廊下の壁伝いに歩き出した年末、家族そろって住居へ戻ったが、玄関は雪でいっぱいであった。

4 戦争が始まり、登校は朝、近所の子供が二列に並び、校門に木銃を持って立っている上級生に、同行の上級生が叫ぶ「歩調とれ、頭右」に合わせて校門を通過した。

1942 年（昭和 17 年）春、南方でゴムのとれるところを占領したとかで、ゴムまりが配られたことがあった。

このころの学校では、飛行機をつくるためにアルミニウムの弁当箱を潰して供出したので、弁当はふた付きどんぶりで持つて行くことになった。割ったり、忘れたりして小言を言われ、風呂敷で下げていくのも重かった。

食事の前に、全員で「よくかめ、一口 50 回、よくかんで食べる人は、頭のよい人」を唱和

した。通学服、ゴム長靴も教室ごとに配布された券の枚数により獲得の激戦が繰り広げられた。先生がそれぞれの消耗度を点検し、認められた者が前に出て「ジャンケン」で配給を受ける勝利者が決まった。

5 四年生になった私は、第2人も通学するようになり、秋まで夕食の支度が日課になった。長女を連れて母は、農家に出かけ、食糧を確保する日々であった。住宅には水道がなく、四軒長屋四棟に1か所の共同栓であり、バケツで汲み、屋内の二斗がめ（36リットル）にためた。便所は、各家に1か所専用のものがあつたが、1棟に2か所の男便所を含む片側9か所、合計18か所が1棟に配置され、それぞれの便槽は共通だったので、小さい子供は、怖がった。学校の便所も同じ造りだった。ほかに子供の仕事には、石炭を道から家の石炭庫か玄関近くの小屋に運ぶこと、この石炭を室内の小さい石炭箱に運ぶこと、ストーブから出た灰を外に捨てること、薪割りなどもあつた。

6 昭和19年以降、五、六年生になると、歴史の授業が始まり、天皇の名前の暗記が始まり、壁にグラフが貼られ、「誰が124代まで早く覚えるか」の競争になった。軍人勅諭*1の暗記や前日発表のあつた大本営*2のニュースから、戦果、相手国の損害、沈めた船の種類～戦艦、巡洋艦、駆逐艦や数も壁の紙に書き込み、体操は、整列、行進、持久走、騎馬戦をした。春、山麓の笹藪を開墾し、かぼちゃを植えたが、収穫した記憶はない。夏休みの課題として、「赤のクローバーの種子採取、いたどりの葉の採取」があつた。前者の種子は、粒も小さく、なかなか量にならなかった。採取法は、花の咲き終わった部分を手でしごいて取り、更に両手でもんで種子のみ取り出す。のち封筒に入れて担任に出すのであつた。男子は、うさぎを飼い、種付けし、出産させ、育てて冬期学校に持参すると、毛皮をはいだ中身が返された。防寒用の資材にするということであつた。

7 炭鉱の住宅の玄関口には、樽に防火用水を汲み、バケツを置き、突破器（先端に引っ掛け、突く鉄製の金具が付き防火のとき破壊？）、水を染みこませて火を叩き消すモップ状の火叩きも用意した。この水汲みは、子供の仕事であつた。

防空壕が8軒に1か所つくられた。地表から1メートルくらい掘り下げ、その上に半地下式の骨組みを作り、後で土を被せる方式であつた。終戦後聞いたところでは、我々の壕では、爆風で簡単に倒れ、中の人間は、生き埋めになるそうだ。

子供たちは、秋、近郊の山に出かけ、ぶどうを摘み、きのこを背負って帰ったが、たまたま当時の三井炭鉱病院の上部、ズリヤマの山あいには華人（中華民国の人）の飯場*3があつた。急いでこの横を駆け抜けた。

8 終戦の放送は、雑音の多い聞きにくいものであり、語句も難しく意味がよくわからなかった。大人たちの様子から、終戦を知り、「どうなるのかな」と思った。終戦は、8月20日過ぎ、アメリカの飛行機が三井上空に飛来し、物資を落下傘で投下した。教科書に先生の指示で墨を塗る作業もあつた。

昭和20年秋、南米唄の引込線に10両以上もの客車が並び、中国人が引き揚げた。この時、窓から新しい日本の札をばらまいて帰った。昭和21年4月、父復員の電報が配達され、間もなく父は、大きいリュック姿で帰宅したが、長女は、恥ずかしがって、なかなか出てこなか

った。

9 帰宅後 1 年くらい「マラリアの熱が出た」といい、父にふとんなど何枚もかけていたことがあった。私が父宛に書いた「少年航空兵になりたい」という手紙の返事は、「母とよく相談して決めるように…」であった。「戦地で次々に死んでいく少年航空兵を見て、少年航空兵にはさせたくなかった」ので、「検閲があり、あのような書き方になった」とのことであった。熱帯の地域まで連れて行かれた多数の軍馬は、すべて現地で命を失った。その大部分は、兵隊が生き延びるための食糧になったとのこと。

10 1994 年 3 月、米不足がマスコミに取り上げられ、「買い占め」まででたというある日、私が父に「ラバウルで終戦前後何を食べていたか」と聞くと、「3 年間さつまいもを食べた」と答えた。これで我が家は、米不足に関する一切のあわてた行動から解放された。日本米以外にも、あり余る食糧が日本に溢れていた。

(みやにし かずよし 昭和 8 年生まれ)

***1 軍人勅諭** 明治 15 年 1 月 4 日、明治天皇から軍人に与えられた訓戒の勅語。正しくは「陸海軍軍人に賜はりたる勅諭」。忠節、礼儀、武勇、信義、質素を説いていた。旧軍隊の精神教育は、これを基調として実行され、軍人にはこれを暗記させた。

***2 大本営** 明治 26 年の戦時大本営条例で法制化され、日清・日露戦争時に設置された天皇直属の最高統帥機関。昭和 12 年に陸軍部と海軍部にそれぞれ報道部が設けられていたが、同 17 年以降は、陸・海の別をやめ、「大本営発表」に統一した。

***3 華人の飯場** 昭和 19 年 7 月に三井美唄鉱業所の奥の谷間に「明華寮」と呼ばれる収容所が急造され、強制的に連行された中国人が収容された。収容所の西側は山、東側はズリ山、盆地のただ一つの南側の出口には関所のような門があり、逃げられないようになっていた。劣悪な環境におかれ、過酷な炭鉱労働に従事させられていた。

美唄町の 4 つの炭鉱全体で強制連行された中国人は、計 1250 人、282 人が死亡し、終戦時には 1014 人が働いていた。

一方、朝鮮半島から強制連行された人々は、タコ部屋などの強制労働に従事した人々を除き、総数約 2 万人と推定され、うち死亡者は確認されただけでも 500 人を超え、終戦時には美唄町全体で 4992 人が働いていた。